

## 三島由紀夫『金閣寺』 — 美の〈日本〉的表象

村木 佐和子

### はじめに

三島由紀夫（一九二五年一月十四日～一九七〇年十一月二十五日）は、戦前から戦後にかけて活躍した小説家である。代表的な小説に『仮面の告白』、『潮騒』、『金閣寺』、『鏡子の家』、『豊饒の海』などがあり、『鹿鳴館』や『サド公爵夫人』などを始めとして戯曲や評論なども多く残している。

本発表で扱う『金閣寺』は、三島の中期の代表作の一つである。作品は、「新潮」（一九五六・一～十月）に発表された。同作品は、一九五〇年七月二日に起きた金閣寺放火事件に取材している。鹿苑寺放火事件とは、鹿苑寺の徒弟の林養賢が国宝の金閣に放火し、金閣が焼失した事件である。この鹿苑寺放火事件は、当時の大きな社会的事件であった。

テキストでは「金閣」が美の象徴として意味づけられており、鹿苑寺放火事件の枠組みを借りながらも、極めて観念性の濃い内容が語られている。主人公は鹿苑寺の徒弟溝口である。幼い時から父によって、美の象徴として「金閣」の存在を教えられてきた溝口は、第二次世界大戦下に、戦火の中で「金閣」と滅びることを夢見るようになる。しかし、戦後、ともに残った溝口と「金閣」との関係は、敵対的なものに変化した。溝口が女性と性関係を持つとすると、その行為の最中に「金閣」の幻が妨害するようになり、溝口は「金閣」を焼くことを決意する。

本発表では、美の象徴とされる「金閣」が、どのような意味を持っているのか、考察を試みた。その際に、戦後、溝口が女性と性関係を持つとすると、「金閣」に妨害されるという点に着目した。「金閣」の性質を、テキストに登場する主な女性の描かれ方から検討したい。

### 1. 女性の関連性

#### 1.1 有為転変する女性

溝口と女性との性的関係を考える時、テキストの中において重要だと考えられる女性は、「有為子」、南禅寺で溝口が見かける女性（女性1）、米兵相手の娼婦（女性2）、洋館の令嬢（女性3）、柏木の下宿の娘（女性4）、生け花の師匠（女性5）、「まり子」の六人である。テキストの中では、最初に登場する「有為子」と、最後に登場する女性「まり子」だけが名前を示されてお

り、間の四人の女性には、名前が示されていない。

表1は、戦前から戦後にかけて、溝口の前に現れた順番に、女性を並べたものである。最初に出会う「有為子」は、溝口が憧れた女性であるが、夭折してしまう。「有為子」の死後、溝口は女性1に出会うが、溝口は彼女を「よみがえった有為子その人だと」見ており、女性1は「有為子」と関連付けられている。又、「有為子の記憶に抗して出来た鏡像」とされる女性2や、溝口が「月下の有為子の面影」を見る女性3も「有為子」と関連付けられていると言えるだろう。

一方、女性4以降に出会う女性たちは、「有為子」とは印象の異なる存在として描かれている。女性5は、戦前、「よみがえった有為子その人だと」溝口が思った女性1と同一人物であるが、既に「有為子」の面影は消えており、「全くはじめて見る別の固体の印象」を持つ女性として描かれている。「有為子」の幻影から切り離された女性5は、白博多の「名古屋」帯を付けているが、後に登場する「まり子」は、溝口に「名古屋」から流れてきたと身の上を明かしている。「すべてに無関心」な性格をもち、しばしば「低くはやり唄」を歌う女性4も、突然「時花歌をうたいはじめ」たり、話題が途絶えると「鼻歌」をうたう「まり子」と共通する。

テキストでは、六人が、何らかの関連性を持たせられていると言える。既に指摘されてきたように、「有為子」という名前は、仏教用語の「有為」から取られていると考えられる。溝口の前に現れる六人の女性は、「有為子」が有為転変していった姿を表現したものとして位置づけられていると言ってよい。<sup>1</sup>

#### 1.2 「有為子」と「まり子」の境界線

溝口は「有為子」から女性3までの相手とは性関係を持たないが、女性4、女性5と性交渉を試みて失敗し、最後の「まり子」において性交渉を成功させる。女性との性関係に留意すれば、テキストでは、戦前から戦後へと時代が下るにつれて、溝口が女性と性関係を持つとしていくことが分かる。溝口が性交渉を持たなかった女性1、女性2、女性3は、先に見たように「有為子」の面影を持っていた。テキストでは、溝口が女性と性交渉に臨むところから、相手の女性から「有為子」の面影が消え、「まり子」の類型に切り替わっていくと考えられる。

「有為子」と「まり子」の間に現れる女性達は、名前を持っていない。換言すれば、固有名詞を持たない女性達は個性を認められず、女性の類型は、「有為子」と「まり子」という二つの類型に収斂されていると考えることができる。本発表では、「有為子」と「まり子」という二つの存在に絞って、以下分析していきたい。

## 2. 戦前の女性「有為子」

テキストにおいて「有為子」は、溝口が戦前に憧れていた女性であり、六人の中で唯一の死者として設定されている。「有為子」は、京都の舞鶴海軍病院に勤務する看護師である。彼女は、脱走兵の子供を身ごもるが、自殺を覚悟した恋人の脱走兵によって射殺される。「有為子」の住んでいた「舞鶴」は、第二次世界大戦前、溝口が少年時代を過ごし、「金閣」への憧れを育んだ土地である。戦前、「舞鶴」には舞鶴鎮守府があり、第二次世界大戦において旧日本海軍の重要な拠点となっていた。

テキストの中で、この「舞鶴」という土地は、夭折のエピソードと関連付けられている。射殺された「有為子」と自殺する恋人の脱走兵は、「舞鶴海軍」に属している。戦死が示唆されている溝口の東舞鶴中学校の先輩「若い英雄」も、「舞鶴海軍機関学校」に所属する存在である。又、鹿苑寺の徒弟で、溝口と同輩の「鶴川」は自殺をするが、「鶴川」という名前も「舞鶴」という言葉に関連付けられたものと考えられることができる。<sup>2</sup>これらの夭折者たちは、「有為子」を始め、「若い英雄」や、美少年の「鶴川」に見られるように、美しい存在として描かれている。

一方、「舞鶴」は、溝口が「金閣」への憧れを育んだ土地であり、溝口に「金閣」が美の象徴であることを教えた父の故郷である。すなわち「舞鶴」は、「金閣」と密接に関わる土地として設定されている。美しい夭折者たちと、美の象徴たる「金閣」という、「舞鶴」の持つ二つの文脈に注目するならば、「金閣」の象徴する美とは、具体的には、夭折の美を表していると考えられることができるだろう。

鹿苑寺境内に建つ金閣そのものは、戦乱が多く起こった中世の不穏な時代に立てられた建物である。溝口は戦前、美の象徴として金閣に憧れ、戦争が激化すると金閣とともに戦火の中で滅ぶことを夢見ていた。テキストでは、第二次世界大戦の時代に生まれた夭折の美意識が、不穏な時代に造られた金閣という建物の比喩を使って表現されていると考えられる。この立場に立てば、溝口と女性との関わりには、「金閣」放火に至るまでの「有為」転変していく夭折の美意識の変遷が、

アレゴリカルに語られていると考えてよい。

## 3. 戦後の女性「まり子」

### 3.1 性関係が示す寓意

「まり子」は、六人のうち最後に登場し、溝口が肉体関係を結んだ女性である。まず、テキストにおいて、溝口が女性と肉体関係を持つことの意味を考えていきたい。

テキストでは、戦後、溝口が女性と性関係を持つとすると、「金閣」に妨害されることが語られている。溝口は「まり子」の前に、女性4と女性5と関係を持つとしようとするが、いずれも「金閣」によって阻まれる。女性4との性交渉の場面では、「私はようやく手を女の裾のほうへ滑らせた。そのとき金閣が現れたのである。(中略)それは私と、私の志す人生との間に立ちほだか」ったと、「金閣」の出現が語られている(傍線部論者)。女性5との性交渉の場面でも、「金閣」は出現する。

「又そこに金閣が出現した。というよりは、乳房が金閣に変貌したのである」「又もや私は人生から隔てられた！」と独言した。「又してもだ。金閣はどうして私を護ろうとする？頼みもしないのに、どうして私を人生から隔てようとする？」(傍線部論者)引用の中では、溝口が女性と性関係を持つことが「人生」という言葉で表現されている。「金閣」が夭折の美意識であるならば、女性と関係を持つことは、死と対極の生、現実の「人生」を生きていくことの比喩であろう。したがって、「金閣」が溝口と女性との肉体関係を邪魔するという場面は、戦後、溝口が「人生」を生きていこうとする際、戦前に育んだ夭折の美意識が邪魔になっているということを示していると考えられる。

### 3.2 「まり子」と『源氏物語』のコード

溝口に女性と肉体関係を持つように促すのは、溝口の大学での友人「柏木」という人物である。上述の女性4、女性5も、柏木が、性交渉を持つよう溝口に配した女性である。この「柏木」は、「とてつもない夢想嫌い」、「この世界を変貌させるものは認識だ」と主張し、「認識」の重要性を主張する存在として設定されている。彼は、溝口に女性と性関係を持つことを薦め、認識を促す人物として位置づけられている。

一方、「柏木」という名前を持っていること、尺八の演奏が上手であること、「南禅斬猫」の公案を通じて猫の話題と関連付けられていることから、「柏木」には『源氏物語』の柏木が踏まえられていることが分かる。『源氏物語』の柏木は、横笛の名手であり、女三宮の猫を預かるエピソードを持っていた。

『源氏物語』において、柏木が猫を預かり、後に女三宮との密通事件を起こす契機となった重要な場面は、八条院での蹴鞠の折の垣間見の場面である。「柏木」に『源氏物語』のコードが織り込まれているとするならば、『金閣寺』において、「まり子」の「まり」という名前や、その「丸いすこし腫れたような顔」は、「柏木」に蹴られ続けた鞠を暗示していると位置づけることができるだろう。換言すれば、「まり子」という名前は、「柏木」に蹴られ続けた存在、即ち認識によって、崩されてきた夢想の果ての姿であると捉えられる。

テキストでは、溝口が性関係を持つに従い、女性は「有為子」から「まり子」の類型に切り替わっていく。女性の姿が、最終的に「まり子」の姿をとることは、女性の類型の変貌が認識によるものであることを示しているだろう。溝口が、「まり子」と性関係を結ぶまでの展開は、戦前からの夭折の美が崩壊し、「人生」を認識していくことのアレゴリーとして解釈できるであろう。まり子と関係を持った後に、溝口は「金閣」を燃やすのである。

#### まとめ

女性との性関係をアレゴリーとして読む時、『金閣寺』は、溝口の抱いてきた夭折の美意識が、認識によって解体されていくさまを描いた作品として読むことができる。<sup>3</sup>

「人生」に代表される現実世界と、「金閣」に象徴される溝口の内面世界との齟齬は、吃音者としての設定にも見られる。溝口は「吃りは、いうまでもなく、私と外界とのあいだに一つの障壁を置いた」と述べており、他者とのコミュニケーションの不能という意味を自らの吃音に付与していた。コミュニケーションの不

能という吃音の位置づけは、「溝」、「口」という名前の設定からも明らかである。

「金閣というその字面、その音韻から、私の心が描きだした金閣は、途方もないものであった」と溝口が述べているように、「金閣」は、現実に存在した金閣ではなく、溝口独自の夭折の美意識を述べたものだと考えられる。テキストは、現実の鹿苑寺放火事件に取材しながらも、言葉に共示的意味を付与して、内面と外界との相克を描いた一つの観念小説として捉えることができるだろう。

#### 注

1. 糸井通浩「三島由紀夫『金閣寺』構造試論—文章論における意図をめぐって」(『愛媛大学法文学部論集』一九七六年二月/佐藤秀明『『金閣寺』論序説—犯罪実行者の手記』(『椋山国文学』一九九三年三月))
2. テキストにおいて「鶴川」は、「光にだけふさわしかった肉体や精神」を持ち、「明朗なその容貌や、のびのびした体躯」を持つた美少年として描かれている。「五月」に夭折した「鶴川」は、溝口によって「五月の花々との似つかわしき、ふさわしき」が回想されている。この「鶴川」への形容は、背景に「五月の花々、チューリップ、スイートピー、アネモネ、雛罌粟、などが斜面の花畑に咲きそろうていた」様子が描かれる舞鶴海軍機関学校の「若い英雄」と共通している。
3. このような夭折の美意識への拘泥は、「戦争とはエロチックな時代であった」、「戦争中に死んでみれば、私は全く無意識の、自足的なエロスの内に死ぬことができたのだ、といふ思ひを禁じたい」(『私の戦争と戦後体験—二十年目の八月十五日』(『潮』一九六五・八)、「私の癒しがたい観念のなかでは、老年は永遠に醜く、青年は永遠に美しい。」(『二・二六事件と私』(『英霊の声』河出書房新社、一九六六・六)など、実作者の三島由紀夫にも見ることができる。

表 1

女性	設定	溝口との性関係	「有為子」との関係性
有為子	海軍の看護師	関係を持たない	
女性1	南禅寺の女性	関係を持たない	「よみがえった有為子その人」
女性2	米兵相手の娼婦	関係を持たない	「有為子の記憶に抗して出来た鏡像」
女性3	洋館の令嬢	関係を持たない	「月下の有為子の面影」
女性4	柏木の下宿の娘	「金閣」に阻まれる	
女性5 (女性1)	生け花の師匠	「金閣」に阻まれる	
まり子	娼婦	関係を持つ	